

えて、ACE 遺伝子型と治療効果の関連を検討中である。

### 38. 高血圧症例における血圧日内変動と脳心血管事故 -dipper vs nondipper -

鈴木康子（東京都老人医療センター）

高血圧症例における24時間血圧の長期予後予測因子としての意義について検討するため、脳心血管合併症の無い未治療期の本態性高血圧134例（平均71.1歳）に24時間血圧を測定し、平均48.5ヶ月の追跡期間中の脳心血管事故発生を調べた。脳心血管事故は17例に認められ、脳血管障害9例、急性心筋梗塞2例、不安定狭心症3例、突然死1例などであった。未治療期の24時間血圧平均値、日中血圧（6:00~22:00）、夜間血圧（6:00~22:00）は脳心血管事故発生と関連が認められなかったが、夜間血圧上昇例と夜間血圧下降例を比較すると前者で脳血管事故の発生が多く、特に高齢者に限ると年齢、性などの因子で補正しても有意に脳心血管事故発生が多かった（相対危険比6.65,  $p < 0.05$ ）。以上より、夜間血圧上昇例では夜間血圧下降例に比して予後不良であり、血圧日内変動パターンの異常は重要な予後予測因子であると考えられた。

### 39. 当院にて経験した原発性アルドステロン症の4例

宮内秀行, 松戸裕治, 佐野剛一  
飯島義浩 (君津中央)  
山本恭平 (同・内科)  
渡部良夫, 永嶋 薫, 片海七郎  
(同・泌尿器科)

原発性アルドステロン症は高血圧症患者の約0.5%に認められるといわれる。平成8年度上半期6カ月において当院で4例の原発性アルドステロン症を経験し手術治療を行ったので報告する。患者はすべて女性で平均年齢は51.8才、術前の各データの平均値は血圧157/91mmHg, レニン活性0.15ng/ml/hr, 血中アルドステロン492pg/ml, カリウム3.1mEq/lであった。腹部単純CT上全例に副腎腫瘍を認め、腫瘍径は15~30mm（平均21.3mm）であった。全例で腫瘍摘出術を施行し、血清カリウムは全例正常化し血圧については術後2例が正常血圧に復し、2例で降圧薬の減量が可能であった。

原発性アルドステロン症は手術により予後良好な疾患であり、日常高血圧診療において常に念頭に置くべきと考えられる。

### 40. 食塩感受性および非感受性の本態性高血圧患者における食塩摂取量の自律神経機能への影響

南 順一, 河野雄平, 瀧下修一  
(国立循環器病センター)

【目的】 食塩感受性 (SS) および非感受性 (NSS) の本態性高血圧患者 (EH) において、食塩摂取量の差異が自律神経機能に及ぼす影響を心拍変動パワースペクトル解析により検討する。

【方法】 入院無投薬下の EH20名において、各7日間ずつの低食塩食期 (1.5g) あるいは高食塩食期 (15g) を設定し、各期の最終日に携帯型自動血圧心拍計にて、血圧、心拍、心電図を30分毎に24時間測定した。R-R 間隔データから周波数パワースペクトルを求め、低周波成分 (LF) と高周波成分 (HF) を算出した。高食塩食摂取により24時間平均血圧で10%以上の血圧上昇が見られた者を SS, 10%未満の者を NSS とした。

【成績】 SS (n=10) では高食塩食摂取により血圧は有意に上昇し、心拍数に有意の変化はなかった。NSS (n=10) では高食塩食摂取による24時間血圧の変化は有意ではなく、心拍数は有意に低下した。心拍変動のパワースペクトル解析において、高食塩食摂取により NSS では HF は有意に上昇し、LF/HF は有意に低下したが、SS では高食塩食摂取により HF に有意の変化は認められず、夜間の LF/HF は有意の変化を示さなかった。

【結論】 SS は NSS に比して高食塩食摂取時に交感神経機能抑制の障害傾向と副交感神経機能賦活の障害が認められた。これより自律神経反応の差異が食塩感受性高血圧の発症に関与することが示唆される。

### 41. 右室負荷疾患における脳性利尿ペプチド (BNP) の臨床的意義

永谷憲歳, 錦見敏雄, 岡野嘉明  
佐藤 徹, 京谷晋吾, 中西宣文  
(国立循環器病センター)

【目的】 右室負荷疾患における BNP 分泌規定因子を明らかにすると共に、BNP は肺高血圧症の治療効果判定、予後推定に有用か否か検討した。

【方法】 右室負荷症例30例、右室容量負荷疾患18例を対象とした。S-G カテーテルより平均肺動脈圧 (mPAP; mmHg), 心拍出量 (CO; Liter/min), 全肺血管抵抗 (TPR; units), 右室拡張終期圧 (RVEDP; mmHg), 平均右房圧 (RAP; mmHg), 肺動脈楔入圧 (mmHg) を求め、超高速 CT より右心筋重量係数 (RVMI; g/m<sup>2</sup>), 右室駆出率 (RVEF; %), 右室拡張末期容積係数 (mL/m<sup>2</sup>) を、また同様に左室指標を